

木の言い分 ⑪

「ニセ、イヌ、モドキ」

今回もまた、樹木名にまつわるお話です。このように並べると、まるで寄席の三題噺のお題みたいですが、実はこれ、樹木の名前によく使われる接頭語、接尾語なのです。そして、いずれもが似て非なるもの、何となく似ているもの、よく似ているが利用価値が劣るものといった樹木自体にとって有り難くない意味を持っています。

さて、それでは具体的に事例を述べていくことにしましょう。まず“ニセ”ですが、あまりに表現が直接的なせいか、キノコ類には2～3あるものの、樹木では「ニセアカシア」以外、普及している名前はありません。そして、この「ニセアカシア」自体、北米からこの樹種を導入した際に、学名の「*Robinia pseudoacacia*」を直訳しただけのものだったのですが、もう一つの和名「ハリエンジュ」よりも有名になって定着してしまいました。

かたや、“イヌ”の方は、犬には気の毒ながら、古来より日本語表現で-犬にも劣る-など良くない意味で使われてきただけあって「イヌツゲ」「イヌガヤ」を始めとして正式な和名だけでも十余種類、方言名に至っては百種類を優に超えるくらいあるようです。その上、方言名は実生活に基づいて名付けられたものなので、必然的に「イヌギリ」「イヌダラ」などのように、地方によって同じ名前が異なる樹種に当てられている例が多くあるので、確認が必要になります。

そして、“モドキ”という言葉には、怪しげな胡散臭い響きが感じられます。そのせいかどうか、「ウメモドキ」「アクシバモドキ」など2～3の種類を除いた他は、外国産の樹木に対して名付けられている傾向があります。その中でも「フジモドキ」「タチバナモドキ」など、比較的早く日本に入ってきたものについては、成る程と思えるネーミングがされていますが、近年になって出回り始めた「シャクナゲモドキ」や「ビワモドキ」などに至っては、シャクナゲの花やビワの葉に似た花木なんて幾らでもあるから、もう少し考えて名前を付けてはと言いたくなります。とはいえ「イチイモドキ」「オキナヤシモドキ」あたりになると、特徴を捉えて命名した努力のあとが伺えます。

-ここで木の言い分-

「わしら、人間どもより古くから生きているんじゃ！

あとから勝手に下らん名前を付けおって！ ケシカラン！」